■「ちくま評論入門」解説――読解問題への過程

20　藤原帰一「超国家アメリカ」

●参考　藤原帰一『テロ後』【316/F9/1】（北野高校図書館）
藤原帰一『デモクラシーの帝国』【319/F9/1】（北野高校図書館）

■目標　地歴公民の知識を応用して理解する。

■追跡

よく知っているつもりの国、アメリカ。いまだ「アメリカの影」の中にいる日本。「アメリカ」とは何か。「超・国家」とはどういうことなのか。読み解いていこう。

①　アメリカ外交の特徴の一つは、**読解問題3**普遍主義の表現である。領土や資源などの具体的な利益が追求される場合でも、そのものとして政策が正当化されることは少ない。利権の確保にも普遍的な理念による正当化が求められるのである。もちろん、そこには国内世論に向けた宣伝としての側面がある。だが、世論の支持が欠かせない他の民主主義国でも、アメリカほど理念によって対外政策を正当化する政府は珍しい。

これについては、トランプ政権においては、少し色合いが変わってきた。「普遍的な理念」なんてどうでもいい、アメリカの利益が第一だ、というものいいが受けた。しかしそれは逆に言うと、アメリカ外交の基本が、筆者のいうとおり、「普遍的な理念」にもとづくという建前を強く持っていることの証拠である。トランプの発言は、その「アンチ」として受けたのである。

そのトランプも、「北朝鮮の非核化」といった「普遍的な理念」を盾として外交に臨む。「領土」や「拉致問題」を掲げる日本の外交のやり方と比べてみると違いがわかる。

建前としての「普遍的な理念」とは何か。人類だれもが享受するべき価値――たとえば「自由」がそれだ。通商の自由、人権としての自由、それらが侵されることをアメリカは許さない――というわけだ。

◎普遍＝いつでも、どこでも、だれでも、と置き換えて読む。
◎理念＝そうあるべきだという考え、と置き換えよ。

②　それでは、なぜアメリカの場合は国際関係における理念が繰り返し表明され、重視されるのだろうか。そこには、普遍主義的な制度によって多文化と多民族の共存と統合を絶えず支え続けなければならないという、アメリカ特有の事情を見ることができる。

問い。なぜ、アメリカだけ理念重視？　答え（仮）。「多文化と多民族の共存と統合を絶えず支え続けなければならない」から。――とまず押さえる。ここ、大事。まず押さえる。

押さえるとは、線を引いておく、ということ。見える化しておくということ。

で、「じゃ、多文化と多民族の共存と統合って何？」「なぜアメリカが支える？」という問いを念頭に置いて読み進める。ここをぼんやり通過してしまうようなアタマではものは読めないよん。

③　ヨーロッパにおいて多民族支配を続けてきたハプスブルク朝やロマノフ朝が倒れた後も、帝政に頼らない多民族支配は世界に残されていた。そのもっとも重要な二つの事例が、ロシア革命とともに統治機構を刷新したソ連と、それ以前から奴隷制と移民受け入れを通じて多民族性と多文化から構成される社会を築いてきたアメリカである。

このへんは世界史の知識がバックアップするはず。歴史重要。

◎ハプスブルク家＝中世以来、神聖ローマ皇帝位を継承した有力な家系。スイスの地方領主から出発し、オーストリアに侵出、ドイツ王の地位を兼ね、ネーデルラント、ブルゴーニュ、スペイン、ボヘミア、ハンガリーなどヨーロッパの広大な領土の他、新大陸にも支配地を持った。またフランスのヴァロワ、ブルボン家、プロイセンのホーエンツォレルン家などと激しく覇権を競った。第一次世界大戦まで続いたが、敗戦によって消滅した。

◎ロマノフ朝＝一六一三年に成立したロシアの王朝。一八世紀にロシア帝国として大国となる。農奴制を基礎としたツァーリズムが継続する中、近代化が遅れて社会矛盾が深刻化し、第一次世界大戦中の一九一七年にロシア革命が起こって倒された。

今の地図を見ればわかるが、言語も文化も異なるたくさんの国に分かれている地域を、かつて、こういった有力王朝が統一支配していた。

ロマノフ朝の支配地図を引き継いだのが、ソ連。新大陸で、ヨーロッパからの移民を引き受けたのが、アメリカ。

④　専制支配に頼ってナショナリズムを押さえ込んだ旧世界の帝政とは異なり、ソ連もアメリカも、多民族の共存を保障する世俗的制度を、少なくとも法文のうえでは持っていた。ことにアメリカは、ヨーロッパがナショナリズムとデモクラシーの時代を迎える一九世紀後半より一世紀も前に、政治的自由を原則とする政治体制をつくり上げていた。アメリカは民族を基礎としない国家として出発したのである。

◎ナショナリズム＝とりあえず、民族主義と置き換えよ。

言語や歴史、宗教、文化を同じくするという意識をもった共同体が民族。ある民族意識は、別の民族による支配を受け続けたとき、そこから独立し、自分たちだけの国を持ちたいと願う。「ナショナリズムが高揚する」わけだ。

専制支配では、異民族は政治的に抑圧される。支配的民族と少数民族の間に差別が生じる。アメリカが実現したのは、建前（法律）の上では、どこからの移民であれ、出自がど

の民族であれ、合衆国の国民となった以上、平等の権利を持つことを謳ったことである（実際は、差別意識や経済格差はあったけれど。先に来た者が後から来た者を差部する――）。

国民国家のことを、ネーション・ステートという。ネーション（民族）が、ステート（国）を構成するという形である。近代国家は、基本的に、ネーション・ステートである（現実には一国が単一民族で構成されることはまずないけどね）。しかし、アメリカは、ユナイテッド・ステートである。アメリカの各州はステートだが、特定の民族を基礎としているわけではない。ステートの中には、いろんなルーツを持つ移民集団が含まれている。

⑤　アメリカを考えるときに重要なのは、それがヨーロッパに見られるような古い国民、つまり、言語や習俗を共有するコミュニティーではなく、理念を共有することで構成された市民社会を基礎としていることである。リプセットの表現を借りれば、最初に生まれた新しい国民（first new nation）がアメリカだった。

対立を抜き出しておこう。

「言語や習俗を共有する共同体」対「理念を共有する市民社会」。前者で働くのは、○○人かどうか、といった仲間意識だが、それは、○○村の人間かどうか、○○家の人間かどうか、といった意識と地続きである。同じ共同体に属している者同士、生き抜くために利害を共にしよう、という意識。後者では、そういう地縁血縁出自を問わず、一つの社会を構成する「市民」として、この社会をうまく維持するための正義・公正をお互い実現することで、生きていこう、という意識のあり方になるだろう（現代文の教科書で、「市民」について学んだことを思いだそう）。

アメリカ社会は、そもそも地縁血縁出自がバラバラな人たちが構成した社会だからだ。だから、結びつくために、誰にでも通用する「理念」（正しさ）が呼び出される。

⑥　しかし逆にいえば、「アメリカ国民」という観念は、特定の民族性や言語、宗教などによって支えることもできない。単なる民族の牢獄ではない多文化の共存を保持する制度を作ったからこそ、その多様性の統合を支えるためにも、普遍的な理念を絶えず確かめ、政治社会の統合を支えなければならない。正義やイデオロギーに訴えることなしには、政策の正当化が得られないだけでなく、社会統合も脅かされてしまう。民族という基盤に頼れない事情が、普遍主義への依存と政治のイデオロギー化を招くのである。

「普遍的な理念」の機能をまとめておこう。

「普遍的な理念」（正義やイデオロギー（ある正しさの信念））は、それによって、多様性を統合する。

逆の言い方をすると、人々の多様性は、統合を危うくする。放っておいては、バラバラになる。だから、だれにでもあてはまる主張（普遍主義）が求められる。またより強い求

心力を求めて、「これが正義なのだ！」という強い信念が求められる（政治のイデオロギー化）。

たとえば、最近、「日本文化バンザイ、日本スゴイ」と唱え、国内にある異文化と差別化することで、「自分たち」を支えようとする一部の人たちがいる。しかし、アメリカではこのような戦略はとれない。ま、実際はいるけど、政治的には、無効である。もちろん、日本でも、他者への攻撃を基礎とするような団結はアカンけどね。

◎**イデオロギー**＝これが正しいという**信念**の体系

⑦　さて、ナショナリズムには境界があり、何らかの民族集団を主体とすることはいうまでもない。だが、自由な市民という原則から政府をつくるときは、どのように境界を定めることができるだろうか。自由主義によって政治社会を定義すれば、その社会の外延や境界は、その原理が普遍主義的なだけに、直接決めることはできない。**読解問題1**どこで自由が終わり、どこで市民が終わるのか、市民の社会というだけでは国境は定まらないのである。

読解問題1「どこで自由が終わり、どこで市民が終わるのか、市民の社会というだけでは国境は定まらない」とは？

こんなんにどう答える？　傍線部だけ見ててもアカンで。**☆傍線部延長術**、ですな。今回は、形式段落全体。

・ナショナリズムには境界があり、民族集団を主体とする。＝民族の住んでいる範囲が境界。

・問い　自由な市民という原則から政府をつくるときの境界は？

答え　自由主義によって政治社会を定義すれば、その社会の外延や境界は、その原理が普遍主義的なだけに、直接決めることはできない。＝どこで自由が終わり、どこで市民が終わるのか、市民の社会というだけでは国境は定まらない。

こんな感じで、整理して、「答え」に当たるところをわかりやすく綴る。傍線部は、直前の部分の言い換えになっている。直前の部分を含めて、自分のことばで消化すればいい。（くっつけただけ）「自由主義によって政治社会を定義すれば、その社会の外延や境界は、その原理が普遍主義的なだけに、直接決めることはできないから、どこで自由が終わり、どこで市民が終わるのか、市民の社会というだけでは国境は定まらない。」

これをもとに、

解答例1「自由主義によって成り立っている社会の範囲は、自由な市民が存在している範囲ということになるが、自由な市民という原理は、どこにでも通用する原理なので、その範囲を限定することができないということ。」100字程度

ナショナリズムとの対比を加えてもいい。長い字数を要求されたとしたら、入れなきゃ

ならない。

解答例２「ナショナリズムによって成り立つ社会の範囲は、その民族の住む範囲として限定できる。同様に考えると、自由主義によって成り立っている社会の範囲は、自由な市民が存在している範囲ということになるが、自由な市民という原理は、どこにでも通用する原理なので、その範囲を限定することができないということ。」140字程度

⑧　国際政治における権力の主体とは、なによりも個別の政府であり、その政府が「国民」を代表しているという擬制に頼っている。しかし、デモクラシーという観念からは、「国民」によって世界を分断し、国民ごとに政府をつくるという世界は見えてこない。合衆国憲法が「われわれ人民」で始まり、ゲティスバーグ演説が「人民の人民による人民のための統治」を唱えたように、アメリカのデモクラシーの主体は、「人民」であり、「われわれ」である。

◎**擬制**＝本当は事実でないことを社会的効用などの理由から事実であるとみなすこと。

擬制の定義からすると、「政府が「国民」を代表している」というのは、事実とちゃうけど、そうしとかな、話ができんからな、ということなんやね。アホなやつが、国の代表としてアホな約束してきたみたいなことも実際起きるけどね。おれら、そんなん、いっこも、ええっていうてへんし。おまえ何約束してきてんねん。みたいなことね。

主体＝政府（国民代表）。これが、国と国とのつきあいのときのお約束。でも、アメリカのデモクラシーの理念では、あくまで主体は、主体＝人民（people）。ダイレクトに people。アメリカと話するときは、people と話せなあかん。そりゃ、口（くち）なんぼあっても足りまへんがな。

⑨　もちろんその「人民」とは、実際にはアメリカ「国民」を指している。しかし、その「人民」は、「民族」のような共同性を前提としてはいないために、限りなく個人に分解することもでき、また「国民」としての外延が明確ではないことから、とめどもなく主体を広げることもできるだろう。合衆国政府の支配地域に住む人々に限られるのか、それとも世界の人々に広がるのか、この理念だけでは「人民」の境界が見えないのである。

アメリカは、よせこせの人たちをまとめるために、人民によるデモクラシーという理念を立てた。みんなで考えよう。みんな、同権、みんな自由やから。黒人白人日系そんなん関係ないから。――そやけど、日本で暮らすおれらは、アメリカ社会とは関係ないから、そのみんなっていうのは、アメリカ国籍ある人とかのことでしょ。――いやいやまあそりゃそうけど、people というのは、だれでも people やともいえるわけですわ。あんたらも people っちゃあ、people やんか。大阪の人でもさ。――まあ、そういや、昔戦争に負けたとき、あんたらこれから Democracy でやりや、ってアメリカにいわれたもんな。いつまで、神の国たらいう、他の国に通用しいひん妄想にたよってんねん。世界は、Democracy よ、

もはや。そういわれましたな。――せやろ？　日本はアメリカから Democracy 輸出してもうたやろ。MacArthur バンザイっていうて、喜んで受け取ったじゃん。

⑩　それでは、アメリカはどこで始まり、どこで終わるのか。より正確にいえば、どこで「アメリカ」が終わり、どこから「アメリカではない世界」が始まるのだろうか。この微妙な問題を考えるために、テレビ番組『スタートレック』を取り上げてみよう。

見たことあるかなあ。問題集の写真でも見ておいて。

⑪　いうまでもなく『スタートレック』とは、二三世紀の未来を舞台として、宇宙船エンタープライズ号が調査飛行を続け、そのなかで異文明と出会うというＳＦ活劇である。だがこのエンタープライズ号は、どの国に属する誰の船なのだろう。

問い。エンタープライズ号の国籍は？　（問い。宇宙戦艦ヤマトの国籍は？）

⑫　エンタープライズ号は、惑星連邦に所属する宇宙船とされている。だがその名前はＵＳＳエンタープライズであり、ＵＳＳという呼称の示すように米海軍に所属している艦船にほかならない。米軍と惑星連邦はどのような関係に立ち、アメリカ政府と惑星連邦の間にはどのような協定や合意があるのか。そんな問題はとりたてて議論もされないまま、惑星連邦の宇宙船が、何の不思議もなく、アメリカ海軍の船名をつけて航行している。

そうか。ＵＳＳやったんや。United States Ship。United Federation of Planets Star Ship に所属することになってるけど、略号は、United States Ship と一致する仕掛けというわけ。

⑬　エンタープライズ号における乗組員の構成も、惑星連邦を反映しているのか、アメリカ社会を反映しているのか、はっきりしない。放送されたシリーズによって乗組員は何度か変わっているが、一九六六年から放送されたもっとも有名な「宇宙大作戦」の例で見れば、ケネディのような相貌のカーク艦長はアングロサクソン系の白人、ドイツ系ユダヤ人のカリカチュアのような顔をした、感情を持たずに論理だけで行動する副長のスポックは、地球人とヴァルカン人の混血、このほかに白人医師や機関部長、日系人の操舵士官、黒人女性の通信士官などが加わっている。

日系の乗組員は、ヒカル・スールー（Hikaru Sulu）。２２３７年、地球のサンフランシスコ生まれの人間男性。アジア系アメリカ人で、日本人とフィリピン人のハーフ。宇宙艦隊士官。階級は大尉。主な任務はパイロット（操舵士）だが、船の武器の操作も担当している。物理学者として登場したときもあるというややこしい設定。ちなみに（ウィキより）。

⑭　白人が多数派を占めつつも東洋人、黒人、女性が参加するこの構成は、異星人が参加していることを別とすれば、アメリカ社会の多文化・多民族性の縮図と呼んでも言い過ぎではない。そして、多元的なアメリカ社会を縮図にし、さまざまな人種・民族が加わっているだけに、これがアメリカ社会の反映なのか、世界の反映なのか、あるいは惑星連邦の構成を反映しているのか、少なくともアメリカの視聴者にとってこのことは問題ではなかった。アメリカ社会の持つ多元性のために、アメリカと世界の境界がぼやけているのである。

ポイント。アメリカ人の意識の中では、アメリカ社会＝世界の多民族社会＝惑星連邦の他民族社会が区別なくつながっているということ。おれたちの世界＝宇宙惑星連邦！

ちなみに、宇宙戦艦ヤマト（知ってる？）の主な乗組員は、沖田十三（じゅうぞう）52歳、古代進18歳、森雪18歳、島大介18歳、ということで、めっちゃ、日本人です。そして、18歳＝高三です。高三が地球を救う。

⑮　『スタートレック』が示すのは、多様な文化や価値観が認められ、出身や信条によって差別を加えられることのない、**読解問題2**開かれた社会としてのアメリカである。そして、現実の世界に多様な価値があり、その多様な価値をアメリカが認める限り、「アメリカ」という小宇宙と現実の世界との間には必然的な壁は存在しない。民族や言語の違いによって設けられる国民国家の国境とは異なって、アメリカの国境は必然ではないのである。

読解問題2「開かれた社会」とはどのようなものか。「閉ざされた社会」との対比でまとめなさい。

まず、「開かれた社会」の内容を拾い出そう。この段落から、

「多様な文化や価値観が認められ、出身や信条によって差別が加えられることがない」

「現実の世界にある多様な価値を認める」

では、「閉じた社会」は？　この段落からなら、

「民族や言語の違いによって設けられる国民国家の国境」。

これらの語句を材料にしてまとめてみよう。**☆構文を先に立てよ。**構文は、設問の形に合わせればいいのでかんたん。「開かれた社会」とは？って聞かれているのだから、

・「開かれた社会とは……である」を軸として、

・「閉ざされた社会とは……である。それに対し、開かれた社会とは……である」と対比。**必ず、開かれた社会の方を後半に。**「開かれた社会とは、……閉じた社会とは違い、……である」という構文もなくはないが、主部（S）と述部（V）が離れすぎ、たぶん変な日本語になる。

解答例1（そのままくっつけた型）「閉ざされた社会とは、民族や言語の違いによって設けられる国民国家の範囲内に留まる社会であるが、開かれた社会とは、多様な文化や価値観が認められ、出身や信条によって差別が加えられることがない社会である。」

解答例2「閉ざされた社会とは、民族や言語の同質性に基づいて国家の範囲を規定する社会であるが、開かれた社会とは、多様な文化や価値観を認め、出身や信条によって差別しないという原理に基づいて構成される社会。」

どんな原理で形成されるか、という形で、対比を明確化したバージョン。

⑯　アメリカがどこまで及ぶのかは、領土を併合するなどの膨張の問題であるよりも、誰をアメリカ人として認めるのかという、アメリカ国籍と参政権の規制の問題であった。現実にアメリカ国籍を持つ人々よりもアメリカ国籍を求める人のほうが多い限り、この構図が異様なものだと自覚される契機も、特にない。

「アメリカ国籍を求める人のほうが多い」という現実は、「誰をアメリカ人として認めるのか」という課題を生む。これは誰でもアメリカ人になる可能性を持つ、という意識を前提としている。しかし、これは他の国（閉じた社会）から見ると異様である。

これから外国人の流入が多くなれば、どう変化するかわからないが、日本のような国に住んでいると、日本で生まれたら、日本人、という意識しかない。

どこで生まれても、people は people だ、どの people もアメリカ人になり得るという普遍原則が、アメリカ（開かれた社会）を成り立たせている。

⑰　ここに、普遍的原則によって政治統合を達成する社会が、まさにその普遍主義のために、「国内」と「国外」の壁を自覚しない、という現象が生まれる。国民国家がその権力を海外に及ぼすことは内政干渉であり、侵略とされるはずだ。ところが、アメリカのなかから見る限り、「アメリカ」という自由の空間を外部に広げることは、内政干渉どころか自由の拡大であり、無謀な権力行使ではなく使命の実現だ、ということになる。

アメリカ軍だけが、世界中どこへでも出かけて爆撃したりするのを不思議に思ったことはないだろうか。この背景にあるのが、「おれたちは普遍」っていう意識だという指摘。政治的なことだけではない。どこにでも、マクドナルドがあり、コカコーラが飲め、さらに、マイクロソフトやアップルのマシンがあり、グーグルで検索し、アマゾンから商品が届く――経済・情報的な壁の喪失もまた、アメリカ発のものだと気づく。

しかし一方、そのアメリカの十字軍的膨張が、たとえばイスラム圏との衝突を生んでいることも、ご存じのはず。

十字軍的、と書いたけれど、「普遍性」が侵略性を帯びるのは、今に始まったことでは

ない。キリスト教という世界宗教布教のミッションは、植民地侵略と同期的に進んでいった。しかし、日本固有の神道が普遍性を持つことはない（たぶん。かつてちょっと、もしかしてあるかなって妄想したときはあるけど。※八紘一宇（はっこういちう）。全世界を一つの家にすること。第二次大戦期、日本が海外侵略を正当化する標語として用いた）。

⑱　民族性ではなく、普遍的価値とそれを体現する制度によって政治権力が正当化され、そのために、権力に誰が従うべきかという政治的主体の定義はどこかに拡散してしまう。アメリカと世界が限りなく重なり合うこの構図が、帝国としてのアメリカの理念的基礎を形作っている。

ここでいう「帝国」の定義は問題集のコラム参照。イメージ的には、世界のあちこちで力を振り回しているジャイアン＝帝国。

デモクラシー、自由という、まっとうな価値が、いつのまにか、アメリカ親分の力の行使を正当化する錦の御旗にすり替わっている。――筆者は最後にそう批判している。おれたちは自由の使者なんだから、従え。おまえのところの島に基地作らせろ。沖縄が突きつけているのは、「アメリカの権力にわれわれが従うべきなのか」という問いだ。もちろんその間には、日本政府が権力の仲介役をしている。世界のあちこちで、なぜか、いつのまにか、アメリカに従わされている事態が広がっている。もうずっと。私たちの払った税金も、いつのまにか、アメリカ製の軍用機を買うのに使われている。

アメリカ＝世界という現実が、アメリカはその正義を世界中で実現すべきなんだ、という考えを生んでいる、というのが最後の一文の意味である。

読解問題３　アメリカ独自の「普遍主義」とはどのようなものか。筆者の主張をまとめなさい。

必ずある最後の要旨問題！　すべての問いは、これに集約される。要旨問題には、これまでの設問で触れた内容も含まれる。重なってはいけない、と考えて、悩む人がいるが、そうではない。

かんたんにいおう。要点を三つに分けて、取り出し直そう。

・定義（内容）
・そのよい面
・その悪い面

☆整理・要旨問題は、取り出すポイントに注意。

四つの形式段落に注目して、要点を取り出してみる。

⑤アメリカを考えるときに重要なのは、……言語や習俗を共有するコミュニティーではなく、（**普遍**主義的）理念を共有することで構成された市民社会を基礎としていることである。

⑥「アメリカ国民」という観念は、……その多様性の統合を支えるためにも、**普遍**的な理念を絶えず確かめ、政治社会の統合を支えなければならない。正義やイデオロギーに訴えることなしには、政策の正当化が得られないだけでなく、社会統合も脅かされてしまう。民族という基盤に頼れない事情が、**普遍**主義への依存と政治のイデオロギー化を招く。

⑮『スタートレック』が示すのは、多様な文化や価値観が認められ、出身や信条によって差別を加えられることのない、開かれた社会としてのアメリカである。そして、現実の世界に多様な価値があり、その多様な価値をアメリカが認める限り、「アメリカ」という小宇宙と現実の世界との間には必然的な壁は存在しない。民族や言語の違いによって設けられる国民国家の国境とは異なって、アメリカの国境は必然ではないのである。

⑰　ここに、普遍的原則によって政治統合を達成する社会が、まさにその**普遍**主義のために、「国内」と「国外」の壁を自覚しない、という現象が生まれる。国民国家がその権力を海外に及ぼすことは内政干渉であり、侵略とされるはずだ。ところが、アメリカのなかから見る限り、「アメリカ」という自由の空間を外部に広げることは、内政干渉どころか自由の拡大であり、無謀な権力行使ではなく使命の実現だ、ということになる。

解答例「アメリカの普遍主義とは、すべての人民に政治的自由を保障するという原則である。民族を基礎とする閉じた社会とは違い、この普遍主義は、多様な人々を統合する理念となり、開かれた市民社会を形成する基礎となった。しかし、この普遍主義は、それが通用する範囲の限界を意識させず、アメリカが自らの政治原則を侵略的に外部に拡大させる結果を生んでいる。」

『『アメリカ』という小宇宙と現実の世界との間には必然的な壁は存在しない」と本文にあったが、今や、国境には壁が作られつつある。これは何を意味するのか。

本文は、アメリカ（帝国）には外部がない、といっていた。アメリカの意識は、外部に対する無自覚を特徴としている。テレビの番組で、アメリカ人に、地図の上で日本はどこか、と聞くようなものがあるが、オチとしては、中国や韓国とごちゃごちゃになっているというものだ。もちろん、米軍や宇宙衛星は世界を精細に監視しているだろうが、それはあくまで「見る者」としてである。

アメリカは、外部を意識し、そこから見られることを意識することがなかった――と、これまでは言えたとしよう。それなら、今起きていることは、アメリカが外部を意識し始

めたということではないか。――中国の古代王朝が、匈奴という外部を意識したように。それはもしかしたら、『アメリカ』という夢と現実の世界との間に、修復できない亀裂が走ったことを意味するかもしれない。

■**読解問題**

1　「どこで自由が終わり、どこで市民が終わるのか、市民の社会というだけでは国境は定まらない」とはどのようなことか。

2　「開かれた社会」とはどのようなものか。「閉ざされた社会」との対比でまとめなさい。

3　アメリカ独自の「普遍主義」とはどのようなものか。筆者の主張をまとめなさい。

■**発展問題**

日本は、アメリカに原爆を投下され、決定的な敗北を喫した後、「アメリカ」という夢の共同体に取り込まれる選択をした。――選択したというのは正確ではない。原爆の影のもと、否応なく、取り込まれ、今も、その影の中にいる。

本文で見てきたアメリカの理念の成り立ちやその功罪と現状をふまえ、では、今後、日米の関係をどのように形作っていくべきかについて、他の資料なども用いて、あなたの考えを論ぜよ。

（参考文献）

白井聡『国体論』【312/SHI/】（北野高校図書館）

白井聡『永続敗戦論』【304/S16/1】（北野高校図書館）

●重要語「ナショナリズム」＝一つの民族は、一つの国家を作るべきだという考え方。

強引な定義といわれるかもしれないが、もっとも実践的だと思われる。実際には、ナショナリズムという「イズム」には、相当複雑な要素が絡み合っている。

大澤真幸『ナショナリズムの由来』【311/O3/1】（北野高校図書館）を読むことを勧めます。